
Ghost mind

リキュール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G h o s t m i n d

【Nコード】

N 4 8 6 9 N

【作者名】

リキユール

【あらすじ】

昼休みに目が覚めた新一。しかし周囲の不可解な点に気付き…世にも奇妙な物語を意識してみました

(前書き)

初の一話完結です

目が覚めるとまだ昼休みだった

いつ眠ったかはよく覚えていないが、あまり長い間眠ってはいない気がした

昼休みだというのに、教室には誰もいない

少しさびれて不気味な雰囲気すら感じてしまいそんな教室を出る

昼下がりの日差しが校舎内を照らす

どの教室も気持ち悪いくらい静かである

（あれ？まだ昼休みだよな？）

時計を見たが、まだ昼の1時過ぎ

普段なら教室にいるはずの生徒が今日は一人もいない
つというより、人の気配すらしない

（もしかして、俺休みなのに学校に来ちまったのか？）

事件で疲れて遅刻しないように学校で寝ていたが
休日で休みだった…

そんな可能性もあるといえばある

しかし、今日は9月10日…金曜日なのだ

階段を下りても誰もいない

職員室にも誰もいない

まるで閉鎖された学校を歩いているようだ…

新一はいろいろ不可解な点には気になったが、学校を離れた

とりあえず家に帰ろうとしたときだった
交差点の向こうに人だかりが見えた

（あ、もしかして、みんなこれを見に来てるんじゃない…）

新一は事件があったと思われる現場に近づいた
人ごみをかき分けながら、なんとか現場の状況を見れる位置までか
き分けた

野次馬の頭やカメラでよく見えないが目暮警部の姿が見えた

「あ、警部…！」

新一は警部に声をかけたが、野次馬の声に紛れて聞こえないようだ
った

そうしているうちに警部はパトカーに乗って戻っていった
どうやら、現場は保存して後日再び調査を行うらしかった

警察が現場を後にすると野次馬もすぐにその場を離れた
新一はその現場に近づいてみる
どうやら、誰かが殴られたか何かで被害にあったらしく
少し血の跡のようなものが残っていた

（なんだ、ただの通り魔か）

非常識ではあるが、少しがっかりした新一はまた家路についた
しかし、またしてもパトカーの姿を見かけた
追いかけていくとまた人だかりがあった
米花もやけに物騒になったもんだ

新一はそう思いつつ、再び野次馬の中を泳ぎ、事件を覗き込んだ

（あ、警部！）

新一は偶然目暮警部と目があつた気がした
すぐに新一は“警部”と声をかけたのだが、また聞こえていないよ
うだ

すると警部は再び現場を後にする

「どっとうなつてんだ？…」

新一は現場を見て愕然とする…

先ほどの現場と今遭遇した現場がまったく同じなのだ

（これって… いったい…）

なぜか、先ほどと同じ光景に出くわしたことに気付いた新一はふと
振り返る

すると、本当なら離れているはずの学校が近くに見えた

普段は冷静な新一も不気味な感じに不安を感じずにはいらなかった

家に戻った新一は部屋に戻ってもう一度今日の行動を思い出そうと
していた

しかし、何も思い出せなかった

一昨日、事件の調査をして終わった後、どうやって家に帰ったのかも
なぜ学校にいたのか、なぜ誰も学校にいなかったのかすらわからない
不安を紛らすためにテレビをつけた

すると、一昨日の拳銃強盗の事件の犯人逮捕の続報が流れていた

「なお、強盗に負傷させられた高校生探偵の工藤新一さんは」

すると、急に頭が痛くなった新一はその場に倒れこんだ
そして、目を閉じると記憶がよみがえり始めた

逃げる犯人に飛びついた
犯人に振り払われ…

『工藤くん!!』

犯人には聞こえなかった目暮の叫び…
意識を失う前に見た血…

(そうか…俺…)

「心よりご冥福をお祈りいたします」

(死んだ…のか)

そう、新一は犯人を取り押さえようとして腕で振り払われ
頭に銃撃を受け、そのまま…

新一は今日の不可解な自分の行動を思い返していた
どうやって学校に行ったかわからなかったのは
死んだ自分の意識だけは本能的に学校に行かなくてはと行動したから
同じ場所を繰り返し通っていたのは、そこに強い未練があるから…

そして、新一にはまだ未練が残っていた
それを思い出した新一は毛利探偵事務所に走り出した
昼にあれだけ晴れていた空はみるみる曇り、大粒の雨が地面に打ち
付けた

事務所の明かりがついていたので、おそらく中に誰がいるだろう
新一は階段を上った

途中で気付いたのは、これだけの雨の中まったく濡れていないこと
だった

（いよいよ、本格的に消えちまうのか）

「新一？」

突然声をかけてきたのは帰ってきたばかりの蘭だった

「らっ 蘭！…！」

「どうしたの？」

声をかけられたのも驚いた

驚いたのはそれだけではない

蘭は死んだはずの自分と話しているのだ

「蘭…お前どうして…？」

「どうしたはこっちの台詞よ」

「何で俺と話せるんだ！？」

「は…あ？なに言ってるの？」

「いや、だって俺は…！」

「…死んだんでしょ？」

（じゃあ、な…なんで）

「まだ、いかせないよ……」

「えっ？」

「あんたにはまだ、事件が残されてるんだから」

蘭が言っている意味がわからなかった

それと同時に激しい耳鳴りが新一を襲った

「今の世界はまだ新一の力が必要なのよ」

「…ん」

「くっ工藤くん!？」

「意識が戻ったのか!」

「和葉、早よ先生呼んで来い!」

「新一くん!…新一くん」

目暮警部や小五郎、平次たちが意識を取り戻した新一に声をかける
新一はまだ少し意識は朦朧としていたが、警部たちの存在には気が
付いていた

「お、俺…」

「ホント、悪運が強いわね」

「はっ 灰原…」

「あなた、頭を強盗犯に撃たれたのよ」

哀は新一の身に起きた出来事を新一に説明した
銃弾は新一の頭蓋骨で止まったので助かったとのこと

「まあ、一番感謝すべきは彼女かもね」

哀の視線の先には疲れ果てて眠る蘭の姿

「彼女、血が足りないと知ったらすぐにあなたに血を分けてたわよ
彼女の輸血がなかったら、あなた本当に死んでたわよ」

「ん…？」

「起きたか？」

「しっ 新一！？もう大丈夫なの…？」

「あ、まっ まあ。あんまり撃たれた意識ないんだけどな」

「よっ よかった…」

「ありがとな、輸血」

「あたし、夢の中で新一にずっと言ってたの」

“この世界にはまだ新一の力が必要だ” って言ってたの

蘭の言葉に新一はうれしいという気持ちより寒気がした

（まっ まさか…）

いやな予感がしていた

そう新一はこれも“夢”ではないかと疑っていた

そう思うと、撃たれたのにあまり痛みを感じないことにも不安を覚える

(じょつ冗談じゃねえぞ!...)

「蘭、俺の頭たたいてくれ。軽くでいいから」

「え? いや、…無理無理!」

「ちよつと触るだけでもいいんだ…」

「…じゃあちよつとだけ…」

蘭の手が新一に近づき、触れる…

やはり痛みはない…

新一は思わず嘆きの声をあげる

「ちよつとしつかりしなさいよ!」

蘭は思わず背中をたたいた

「痛えっ」

それと同時に新一はガッツポーズをした

蘭にはその意味すらよくわからなかった

新一はそのあとすぐに“もうひと眠り”と言ってすぐに眠った

蘭は新一の手を握ってその様子をやさしく見つめていた

（後書き）

ちよつと変な話を書いてみたくなったので衝動的に書きました

とにかくなんか気持ち悪い話にしたかった

もちろん最後はハッピーエンドっぽく書いてますが

新一は再び眠ったのは…

世にも奇妙な物語の無視ゲームを意識して書いてます
まあ無視はされてませんが笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4869n/>

Ghost mind

2010年10月8日12時43分発行